ポライトネス・グラマー
— コミュニケーション行動評価概念の日韓比較 —

南 相瓔・西嶋 義憲・斉木 麻利子*

ポライトネス (politeness) とは，コミュニケーションを円滑に行なうために必要な，コミュニケーション参与者間の配慮行動である。本稿では，まず，このような配慮行動の背景にある要因を，社会的および心理的側面から分析する。また，これに基づき，ポライトネスを普遍的に説明するための文法モデルを提案する（ポライトネス・グラマー；Politeness Grammar)。さらに，このモデルを用いることにより，日本語と韓国語におけるコミュニケーション行動評価概念（evaluating concept of communicative behavior）が，客観的な形で比較可能になるということを主張する。

キーワード：ポライトネス，社会的接近距離，心理的接近距離，コミュニケーション行動評価概念，通常性

1．はじめに

日常的なコミュニケーションにおいて，相手と社会的・文化的背景を共有している場合，自分の行動に疑問を抱いたり，相手の行動に違和感を覚えたりすることは，それほど多くない。

しかし，社会的・文化的背景を異にする者が対話相手となった場合，相手の言動をおかしいと思ったり，自分自身の言動が相手にうまく理解されていないと感じたりすることが頻繁に起きる。これは，自分にとって通常ごく当たり前のコミュニケーション行動が，当たり前のものだと感じられなくなることに起因する。すなわち，この場合，自分が想定している通常性（communicative normality, cf. Eelen (2001)，以下 CN)，とりわけ，ポライトネス（politeness）に関わる CN の具現化が成立しなくなっているのである。

一般に，コミュニケーション行動において，人は，相手も自分と同じルールあるいは習慣に従って行動していると想定する。これは，コミュニケーション参与者全員に当てはまる態度である。ところが，社会的･文化的背景の異なる者同士がコミュニケー

ションを行なう場合，それぞれが，自分の社会・文化に通用しているCNを前提としながら行動しがちである。そこに，CNの違いによる「ずれ」が生じる余地がある。そしてその結果，円滑なコミュニケーションが成立しなくなってしまうのである（Marui 1996）。

CNのずれは，コミュニケーション参与者間で，ポライトネスの様式・様態そのもの，あるいはその解釈が異なる場合に生じるものだと考えられる。ポライトネスとは，コミュニケーションを円滑に行なうために必要な，コミュニケーション参与者間の配慮行動のことである（Ide 1988）。また，これは，CNを具現化するための重要な要素でもある。ポライトネスの様式・様態は，社会・文化または個人に依存しており，コミュニケーション参与者間で，共通な場合も，異なる場合もある。

したがって，異文化間コミュニケーションを適切に分析し，理解するためには，CNの具現形式としてのポライトネスに着目し，それを客観的に記述する手立てが必要になる。

ポライトネスの研究では，Brown & Levinson（1987）が有名である。Brown & Levinson（1987）は，スピーチ・アクト（speech act）を研究対象とし，フェイス（face）を脅かす行動（face threatening act）の深刻度は，文化によって異なるということを指摘している。また，そのような深刻度の違いを計測するために，ある公式を提案している。しかしながら，その公式は，スピーチ・アクトの文化ごとの違いを説明するためのものであり，個人のコミュニケーション行動を説明するものではない。したがって，Brown & Levinson（1987）は，コミュニケーション参与者間に観察されるポライトネス評価のずれを捉えることはできないのだ。

本稿では，コミュニケーション行動評価概念（evaluating concept of communi-cative behavior）[1]を研究対象とし，その背景にあるポライトネスに関わる要因を，社会的および心理的側面から分析する。そして，それに基づき，コミュニケーション参与者間のポライトネス評価のずれを説明する。

日本語のネイティヴ・スピーカー（以下J）と韓国語のネイティヴ・スピーカー（以下K）両者のポライトネス基準が確保されているコミュニケーション場面を想定してみよう。その場合，地位の差があるにもかかわらず，目上の者が目下の者に接近してくることを，Jは，「気さくだ」という表現を用いて評価することがある。しかし，韓国語には，これに相当する慣用化された語彙が存在しない。一方，目下の者が，目上の者に対して，乱暴な言葉遣いをした場合，JもKも，それを否定的に評価し，それを表現する慣用語彙は，日本語にも韓国語にも共に存在する。

このような日韓のポライトネス基準の相違点（ずれ）および共通点は，コミュニケー

ション参与者AとBのそれぞれが，お互いに対して想定する，社会的接近距離に起因すると分析される。社会的接近距離（Social Distance，以下SD）とは，AとBのそれぞれの背景にある社会や文化，また，時代や地域などの環境に影響され，規定されるものである。また，AB間に想定される年齢，性，職業，地位，学歴などの違いが，SDを決定する要因になる。したがって，たとえば，同年齢，同性，同職業，同学歴を持つAとBの間のSDは，きわめてゼロに近いと考えられる。また，年齢，職位，学歴などの差が大きければ大きいほど，AとBとの間のSDは，長くなる。

さらに，JとKのコミュニケーション場面において，Kが自分のポライトネス基準に従って行動した場合，Jは，Kの行動を「あつかましい」「ずうずうしい」と感じることがある。逆に，Jが自分のポライトネス基準に従って行動した場合，Kは，Jの行動に「**스스럽다**」「**서먹서먹하다**」という印象を持つことがある[2)]。

この場合のずれは，コミュニケーション参与者AとBのそれぞれがお互いに対して期待する，心理的接近距離のずれに起因すると分析される。心理的接近距離（Pychological Distance，以下PD）とは，コミュニケーションの相手が，自分にとってどの程度身近に感じられるかの度合いで測られる。相手を近しい人物だと感じている場合には，相手との間のPDは短い。一方，相手を身近に感じられず，心を開くことができない場合には，相手との間のPDは長い。

ここで注意すべき点が三つある。

第一に，上述したように，SDは，コミュニケーション参与者AとBのそれぞれが置かれている環境によって規定されるものである。それに対してPDは，AとBが置かれている状況（コンテクスト）の変化に応じて，それぞれの意識の中で，相対的に変容（伸び縮み）するものである。要するに，SDが，社会・文化的なポライトネス要因（ポライトネス具現の背景にある要因）である一方，PDは，個人的なポライトネス要因なのである。

第二に，SDとPDを用いることにより，ポライトネスの概念を操作的に規定できる。なぜならば，ポライトネスは，相手と自分との関係を適切に判断することに基づいたコミュニケーション行動であり，その判断の基準が，SDとPDにあるからだ。

最後に，SDとPDは，両者とも，許容範囲を持つものと仮定する必要がある。コミュニケーションにおいて，ポライトネスが満たされた状態は，無標（unmarked）であり，様々な様相を呈している。また，その様相は，円滑なコミュニケーションを阻む有標（marked）のケースが特定されることにより，初めて定義されるものである。

たとえば，Jは，コミュニケーションの際に，相手に親しみやすさを期待する。しかし，対話相手は，期待した以上に近しい態度をとる場合がある。その場合，Jは，「な

れなれしい」「親しき仲にも礼儀ありだ」といった表現で，その態度を評価することがある。逆に，対話相手が，期待するような親しみを表わさない場合，「よそよそしい」「そっけない」といった表現で評価することもある。

このような，ネガティヴな評価に繋がるケースが有標のケースであり，ポライトネスは，これらとの関係で，相対的にしか定義され得ない。ポライトネスは，絶対的な値を持たず，その具現の仕方にも広がりがあるのだ。上述したように，ポライトネスの判断基準は，SD と PD にある。したがって，ポライトネスの操作的定義の際には，SD と PD の両者に幅を持たせる必要があるのだ。

2．本稿の目的

本稿では，コミュニケーション参与者間に SD と PD を仮定することにより，言語によって様相が異なるポライトネスの概念を説明するための普遍モデルを提案し，これをポライトネス・グラマーと呼ぶ（Politeness Grammar）。そして，このモデルを適用することにより，日本語と韓国語におけるコミュニケーション行動評価概念が，客観的な形で比較可能になるということを示す。

このような研究は，当該分野では現在までに存在しない。また，コミュニケーション行動評価概念の対照には，十分な関心が向けられてきたが，客観的な手法を用いて調査・分析を行っている研究は，数少ない[3]。

Ide et al.（1992）は，そのような研究のうちの一つである[4]。この論文では，「ていねいな」を始めとする10個の日本語の基本概念と，これらに対応するアメリカ英語の基本概念が比較されている。また，その結果に基づいて，両言語の対応する概念について，共通点と相違点が指摘されている。これによると，アメリカ英語の個別評価概念である「polite」と「friendly」は，概念上互いに似ているが，日本語の個別評価概念である「ていねいな」と「親しげな」は，互いに対立している。言い換えると，Ide et al.（1992）は，「polite」と「friendly」は，同じカテゴリーに属するが，「ていねいな」は，「親しげな」と別のカテゴリーに分類されると分析しているのである。

この分析は，次のような問題点を含んでいる。日本語の「ていねいな」は，円滑なコミュニケーションの総体を指し示すという点で，確かに，アメリカ英語の「polite」に対応する。これらの表現の社会的・文化的使用背景が異なっていたとしてでもある。しかし，日本語の「親しげな」が，アメリカ英語の「friendly」に対応しているかどうかについては，疑問の余地がある。このことは，Ide et al.（1992）でも意識されており，次のような指摘がある：

Sitasigena was chosen for the purpose of the questionnaire, as an adjective corresponding to friendly, because it is the form describing the mood of someone else's behaviour rather than the subjective mood of the speaker. *Sitasii*, instead, is the form representing the speaker's subjective psychological feeling (p. 294, fn. 9).

「親しげな」という表現は，他者の行動様態を表わすだけでなく，「親しさ」の外見性をも強調する。また，場合によっては，この表現の使用者側に，隠された意図が存在することを暗示させるものでもある。なぜなら，接尾辞の「～げな」は，否定的なニュアンスをかもし出しながら，物事の外見を強調するという用法を持つからである。「親しげな」は，「親しそうだが実際はそうではない」ということを含意し，そしてこれは，アメリカ英語の「friendly」には，決して付随しない意味的要素なのである(Nishijima 2000)。

以上の点を考慮すると，Ide et al. (1992) によって，「ていねいな」と「親しげな」が互いに対立する概念であると見なされるのも当然である。なぜなら，「ていねいな」は，「ていねいさ」そのものを携えているとする表現である一方，「親しげな」は，「親しさ」を携えていないことを表わす表現だからだ。

また，もし，「friendly」に対する概念として，「親しげな」ではなく，他の日本語表現が選ばれていたならば，Ide et al. (1992) の調査結果は，かなり異なったものになっていたはずである[5]。

このような指摘から，コミュニケーション行動評価概念についての異なる言語間の対照研究では，対応する概念，あるいは類似と見なされる概念を見つけ出すことが，きわめて難しいことがわかる。そもそも異なる言語間において，片方の言語における任意の概念が，他言語における任意の概念に，一対一で対応するとは限らない。よって，概念の対応関係を導き出したり，それぞれの社会･文化で円滑なコミュニケーションを行なうために有効な概念を抽出したりするためには，概念自体を操作的に定義し，それに基づいた比較調査を行なう必要があるのだ[6]。

次節では，そのための道具立てを提案する。

3．ポライトネス・グラマー

本節で提案するポライトネス･グラマー（以下 PG）は，コミュニケーション場面において，話者・聴者 (speaker-listener) が自己のポライトネス基準に基づいて行なう，２種類の行動を説明するものである。一つは，話者側に立った場合の，ポライトネス

の具現である。もう一つは，聴者側に立った場合の，対話相手によるコミュニケーション行動の解釈・評価である。

本節では，このような PG に備わった，主要メカニズムをデザインし，その役割について解説する。

3．1　前提

第１節の議論より，ポライトネスを反映するコミュニケーション行動評価概念を，客観的に記述・説明するためには，次の２点を考慮する必要がある。一つは，ポライトネスは，SD と PD を仮定することにより，操作的に定義されるということである。もう一つは，ポライトネスの具現様式には広がりがあり，よって，その要素となる SD と PD は，幅を持つものとして定義されなければならないということである。

本稿では，この幅を，コミュニケーション参与者が，相手との間に想定している，SD および PD の，理想値からの誤差を反映するものだと仮定する。ここで言う誤差とは，コミュニケーション場面において人が持つ，対話相手が社会的・心理的に自分に接近する，あるいは自分から遠ざかる場合の，許容範囲を反映する。

コミュニケーション場面において，対話相手が，SD，PD の許容範囲を超えて自分に接近してきた場合，または，自分から遠ざかった場合，人は，相手の行動を，自分が想定する CN を逸脱したものと判断し，ネガティヴに評価するのである。一方，対話相手の自分までの距離が，この許容範囲内に留まっていると判断される場合，人は，相手の行動をポジティヴに，あるいは当たり前だと評価するのである。

3．2　グラマー・デザイン

上述したように，コミュニケーション場面におけるポライトネス要因は，対話相手との間の SD と PD によって，操作的に定義される。

本稿では，これをまず，座標系として規定するために，グラフ上の０（ゼロ）地点を対話者本人の置かれている位置とし，ｙ軸上に SD，ｘ軸上に PD を定める。すると，これらと相対的に，グラフ上における対話相手の位置が，図１のようにプロットされる。

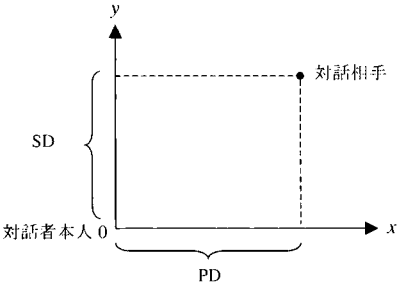

図 1　グラフ上に表示される SD，PD，そして
コミュニケーション参与者の位置

さらに，対話者本人の位置，対話相手の位置，対話相手の位置から垂直に降ろした直線と x 軸との交点を結ぶと，図 2 のような三角形が求められる。本稿では，この三角形を，ポライトネス三角形 (Politeness Triangle，以下 PT) と呼び，話者･聴者のポライトネス基準を記述･説明するための，PG に備わった主要装置であると位置づける。

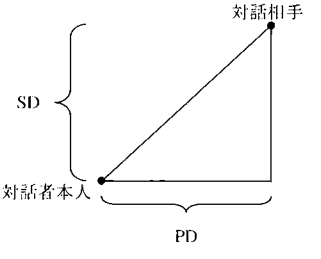

図 2　ポライトネス三角形 (Politeness Triangle; PT)

PT を仮定すると，第 3．1 節で説明したような，対話者が対話相手との間に持つ SD と PD の許容範囲は，図 3 のように，PT 表示に組み込まれる。

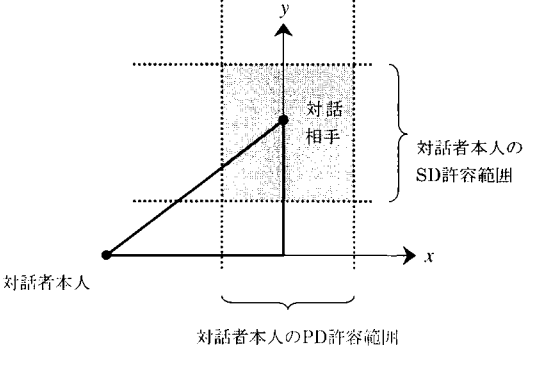

図3　SDとPDの許容範囲

図３からもわかるように，対話相手をこの図のグレーの四角形内にプロットすることよって，様々な形状のPTが求められる。そしてこれらが，ポライトネスが具現される際の，多様な背景を反映するのである。

ここで注意すべきなのは，PTならびに許容範囲の四角形は，個人のポライトネス基準を反映するものであり，社会や文化，時代や地域の構成員間で，必ずしも共通するものではないということである。人はそれぞれ，コミュニケーション場面において，対話相手が図３のグレーの四角形内にプロットされる，と判断する限り，自己のポライトネス基準に応じた行動を取るのである。

しかし，コミュニケーションの過程において，対話相手のある言動により，そのプロット位置が，図３のグレーの四角形外であると判断される場合がある。そのような場合，自己のポライトネス基準を，コミュニケーションにアプライすることが困難になる。そして，その結果，円滑なコミュニケーションは成立しなくなる。最悪の場合には，コミュニケーション自体が，ストップしてしまうこともあるのだ。

以上の議論より，PT表示は，次の二つの機能を持つと言える。一つには，コミュニケーションにおいて，ポライトネス具現がなされる際の背景要因を表示するという機能である。もう一つは，対話相手の言動を，どこまで容認できるかという，判断のための尺度を提示するという機能である。

３．３　デモンストレーション

コミュニケーション参与者をＡとＢとする。さらに，Ａが部下，Ｂはその上司であるとする。

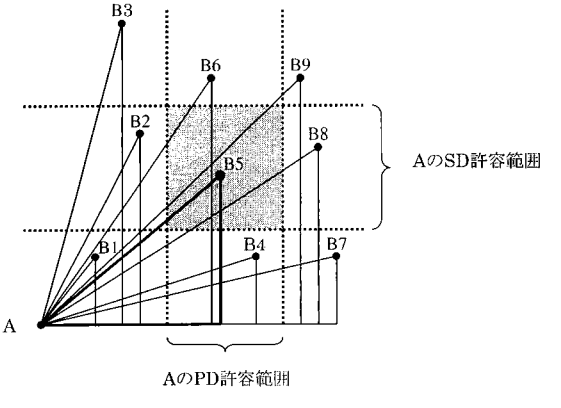

図４　Ａ（部下）がB(上司)との間に想定するPT

このケースでは，A の社会的地位は，B よりも低い。この差は，SD の差として，グラフの y 軸上に表わされる。よって，図 4 のように，A から見た B は，y 軸上 A より上にプロットされる。

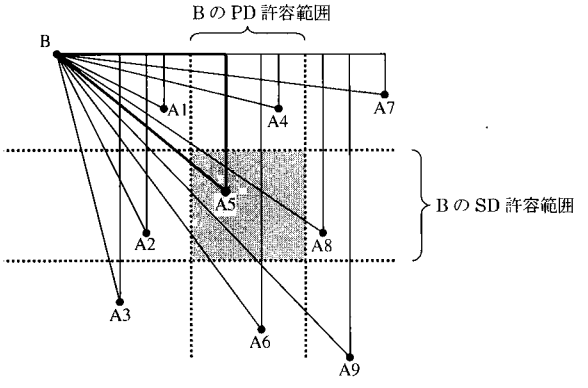

図 5　B(上司)が A（部下）との間に想定する PT

一方，B から見た A は，図 5 のように，y 軸上 B より下にプロットされる。

また，PD は，第1節で述べたように，社会･文化によって定められるものではない。したがって，A と B が想定する PD は，相対的かつシンメトリックな関係を持つ。よって，両者とも，図 4 と図 5 のように，単なる x 軸上の距離として表示される。

さらに，A と B とのコミュニケーション場面において，ポライトネスを実行する際に，A が B との間に想定する SD と PD は，図 4 の太線の PT，一方，B が A との間に想定する SD と PD は，図 5 の太線の PT によって例示される。これらの PT において，A が想定する B の位置，B が想定する A の位置が，それぞれ，B 5，A 5 として，互いの接近許容範囲を表わすグレーの四角形の内側にあることに注意してほしい。

しかしながら，コミュニケーションの過程には，A，B のそれぞれが，相手の想定するポライトネス基準から外れてしまうような言動を行なう場合がある。これらのケースは，PD と SD が許容範囲を超えて，縮小するか，または拡大するかという基準で分類され，論理的には，表 1 に挙げる 8 通りある。また，これらのケースは，図 4 と図 5 のそれぞれにおいて，普通線で記した 8 種類の PT によって表示される。

表1　SD，PDの許容範囲を超える縮小・拡大を表わす8通りのケース

ケース	SD，PDの縮小または拡大	図4におけるBの位置	図5におけるAの位置
1	SD，PD両者が縮小	B1	A1
2	PDのみが縮小	B2	A2
3	SDが拡大，PDが縮小	B3	A3
4	SDのみが縮小	B4	A4
5	SDのみが拡大	B6	A6
6	SDが縮小，PDが拡大	B7	A7
7	PDのみが拡大	B8	A8
8	SD，PD両者が拡大	B9	A9

3．4　PD概念とSD概念

PD，SD，および，それぞれが許容範囲内に収まるか否か，という尺度を用いることにより，コミュニケーション行動評価概念は，次の二つに分類される。

一つ目は，専らPD上の操作により，普遍的に説明される概念グループで，たとえば，日本語の「気さくだ」「よそよそしい」「ずうずうしい」がこのグループに分類される。また，PDの距離という観点から，このグループに属する概念は，次の3種類に分類される：(i) PDの距離が，許容範囲内に納まる場合の評価概念，(ii) PDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念，そして，(iii) PDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念，である。このようなコミュニケーション行動評価概念を，本稿では，PD概念と呼ぶ。

PD概念に対するもう一つの概念グループは，専らSDを仮定することにより，説明可能なミュニケーション行動評価概念を含む。本稿ではこれらの概念を，SD概念と呼ぶ。たとえば，「ひかえめだ」「へいこらしている」「生意気だ」が日本語の場合の例である．SD概念は，PD概念と同様に，SDの距離および許容範囲という観点に基づくと，次の三つに下位分類される：(i) SDの距離が，許容範囲内に納まる場合の評価概念，(ii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念，そして，(iii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念，である。

ここで注意したいのは，PDとSDは，通常連動し，拡大または縮小するものだということである。

たとえば，コミュニケーション相手が，自分の社会的地位の高さにもかかわらず，「ひかえめな」行動をとった場合，人は，相手に，よりいっそうの親しみを感じることがある。また逆に，目下の相手が，「生意気な」言動を行なった場合，相手への親しみの感情が薄れてしまうこともある。

対話相手への親しみの度合いを表わすコミュニケーション行動評価概念は，PD概念

に他ならない。さらに，「ひかえめな」と「生意気な」は，謙虚さの度合いを表わす日本語のコミュニケーション行動評価概念であり，上述したように，これらは，SD 概念に分類される。

以上のように,PD と SD のそれぞれに関連するコミュニケーション行動評価概念は，互いに密接な相関関係を持っているのである。

しかしながら，PD と SD の連動した縮小・拡大は，本稿では扱わない。これは，将来の研究課題に置くこととし，以下では，PD 概念と SD 概念を，それぞれ，PD の縮小・拡大，SD の縮小・拡大という観点からのみ分析することとする。

4．コミュニケーション行動評価概念の日韓比較

本節では，上で提案した PG のメカニズムが，コミュニケーション行動評価概念の日韓比較に適切にアプライされ，共通点・相違点の抽出に貢献し得ることを示す。

4.1　日韓 PD 概念

第3.4節で指摘したように，PD 概念は，任意の話者が，対話相手との間に想定する PD の距離によって，次の3種類に分類される：(i) PD の距離が，許容範囲内に納まる場合の評価概念，(ii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念，そして，(iii) PD がコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念である。

(i) のケースには，日本語では，「親しみやすい」「気さくだ」といった評価概念が当てはまり，韓国語では，「**스스럼없다**」「**허물없다**」という評価概念が当てはまる[7),8)]。また，(ii) のケースには，日本語の「よそよそしい」「そっけない」という評価概念，韓国語の「**스스럽다**」「**서먹서먹하다**」という評価概念が当てはまる[9)]。

しかしながら，(iii) のケースに当てはまる概念を表わす慣用的な語彙が，「あつかましい」「ずうずうしい」等，日本語には存在するが，韓国語には存在しないということに注目してほしい。

韓国語のネイティヴ・スピーカーによると，あえて，このケースを表わすならば，「**예의없다**」「**버릇없다**」という表現を用いるという[10)]。さらに，これらの表現は，分析的・説明的な表現で，文字通り，「礼儀がない」という意味を持ち，(iii) のケースだけではなく，礼儀を欠く行動一般を表現するものなのだという[11)]。

以上のことを整理すると，日本語と韓国語における PD 概念は，図6のように分布していることになる。

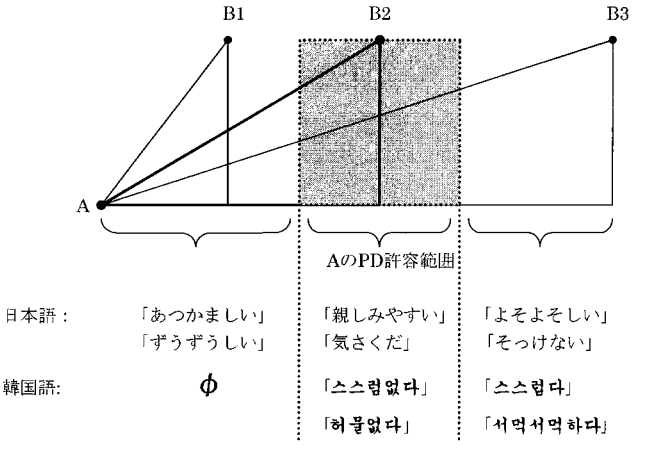

図６　PD 概念の日韓 PT 分析

さらに，上の議論から，日本語と韓国語のネイティヴ・スピーカーが，親しみのポライトネス具現の背景に持つ PT の相違点が，明らかになってくる。

すなわち，日本語のネイティヴ・スピーカーがコミュニケーションの際に想定する PT は，図７のように，３種類に分類される。相手を PD 許容範囲内に置くもの，許容範囲を超えて PD が拡大しているもの，そして，許容範囲を超えて PD が縮小しているものである。

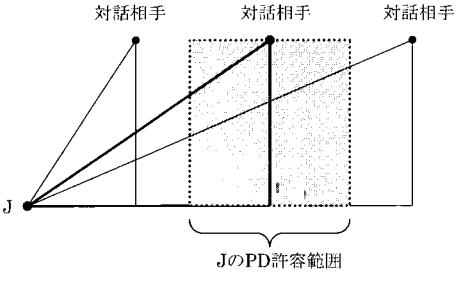

図７　J の PD 許容範囲

これに対して，図８に示すように，韓国語のネイティヴ・スピーカーの PT では，PD が，日本語の PD のような区分を呈しておらず，PD の許容範囲が，x 軸上限りなくゼロ方向に近づいていると考えられる。その理由は，次のように説明される：上述したように，韓国語には，PD が許容範囲を超えて縮小するケースを特定するための慣用語彙が存在しない。このことを考慮すると，当該ケースは，日常において注目度が低いと推測されるのだ。少なくとも，韓国語では，PD の許容範囲と，許容範囲を超え

てPDが縮小するケースとの間に，境界線を引くことが，ほとんど不可能だと分析されるのである[12]。

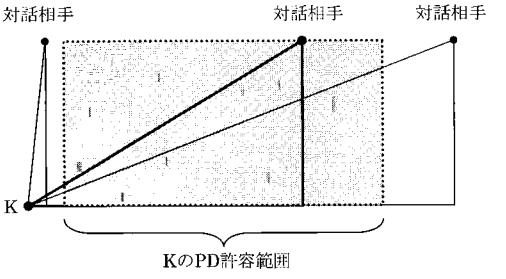

図8　KのPD許容範囲

このような日本語と韓国語のコントラストは，日本語と韓国語のコミュニケーション行動制御定型句（controlling routine formulae for the communicative behavior）[13] の違いをも説明する。

日本語には，「親しき仲にも礼儀あり」「親しき中に垣をせよ」「兄弟は他人の始まり」といったコミュニケーション行動制御定型句があるが，本研究のインフォーマントである韓国語のネイティヴ・スピーカーによると，韓国語には，これらの表現に対応するものが見当たらないという。

この違いは，次のように分析できる。すなわち，上述したように，JのPTには，PDの許容範囲と，許容範囲を超えたPD縮小範囲との間に，明確な境界線があるが，KのPTには，これがないのに等しい。上記のコミュニケーション行動制御定型句は，PD縮小範囲の存在を前提とし，それを維持するための表現である。つまり，これらの表現の存在は，JのPTが，本稿で指摘した様相を呈していることの当然の帰結である．一方，上述したように，この範囲に対するKの注目度は低い。したがって，そこを維持するための制御定型句がないことは，予測できるのである。

4．2　日韓SD概念

第3．4節で述べたように，SD概念は，次の3種類に分類される：(i) SDの距離が，許容範囲内に納まる場合の評価概念，(ii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて拡大している場合の評価概念，そして，(iii) SDがコミュニケーション参与者の許容範囲を超えて縮小している場合の評価概念，である。

日本語の場合，(i) には，「謙虚だ」「慎み深い」「腰が低い」「大人しい」[14] 等の様々な概念が当てはまる。さらに，同等の概念として，「ひかえめだ」「低姿勢だ」を挙げ

るネイティヴ・スピーカーがいるが，同時に，この二つの概念が，時と場合によって，ネガティヴな意味で用いられるという点を指摘するネイティヴ・スピーカーも存在する。よって，そのようなネイティヴ・スピーカーのPGにおいては，この二つの評価概念は，上記（iii）のケースに当てはまる場合があると分析される。

一方，韓国語では，(i) のケースを表わすのに用いられる慣用表現が，「**겸손하다**」しか存在しない[15]。

(ii) のケースに当てはまる評価概念を表わす慣用語彙は，日本語にも韓国語にも豊富にある。たとえば，日本語からは，「生意気だ」「高飛車だ」「偉ぶっている」「人を馬鹿にしている」等が挙げられ，韓国語からは，「**고자세다**」「**거만하다**」「**오만하다**」「**건방지다**」が挙げられる[16]。

(iii) のケースに関しては，日本語には，上述したように，一部のネイティヴ・スピーカーにとっての「ひかえめだ」「低姿勢だ」の他に，「へいこらしている」「へこへこしている」がある。また，韓国語には，「**굽실거리다**」「**저자세다**」という慣用表現がある[17]。

以上の調査結果は，図９のようにまとめられる。

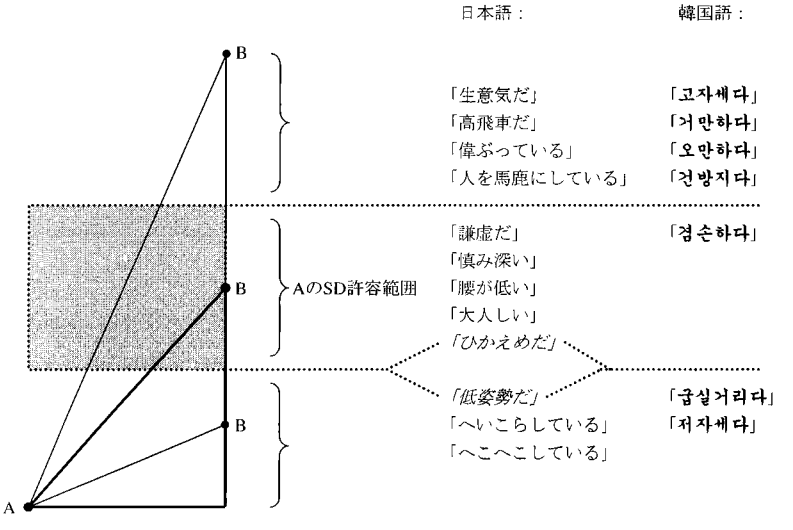

図９　SD概念の日韓PT分析

この図および上の議論から，以下の２点が明らかになってくる。一つは，図10に示すように，JのPGにおいて，SD上の許容範囲が縮小，あるいは拡大する可能性があるということである。そしてもう一つは，図11に表わすように，日本語の場合と対照的に，KのPGにおける，SDの許容範囲の幅が狭いということである。

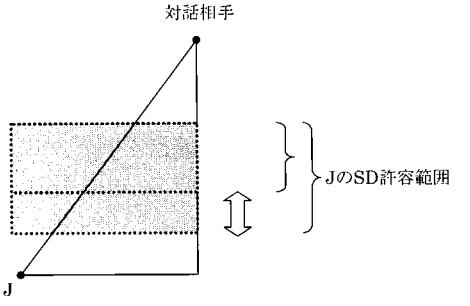

図 10　J の SD 許容範囲

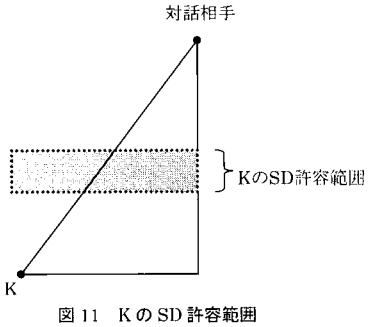

図 11　K の SD 許容範囲

図10に示した日本語の PG における SD 許容範囲の縮小・拡大からは，次のことが指摘される。

まず，ここでの拡大変化は，0（ゼロ）方向に向かったものである。つまり，SD の“階段”をくだって，謙虚さの度合いが高まる方向への拡大である。このことは，日本語における，謙譲表現の存在を説明すると考えられる。なぜならば，謙譲表現とは，自分の社会的立場を低めた形で，物事を提示する言語手段だからだ。

さらに，図11に示したように，K の PG においては，SD の許容範囲が狭く，これはまた，縮小も拡大もしない。このことからは，K の PG が，円滑なコミュニケーションを行なうためには，参与者に，限定された行動しか許さないように，組み立てられているということが予測できるのだ。

５．おわりに

本稿では，ポライトネスを普遍的に説明するための手段として，ポライトネス・グラマー（PG）を提案した。そして，このモデルを用いて，日本語と韓国語のコミュニケーション行動評価概念を比較し，その相違点を明らかにした。また，この分析により，本 PG モデルの妥当性を示した。

本研究の今後の課題としては，次の四つが挙げられる。

第一に，本稿が分析対象としたのは，日韓におけるコミュニケーション行動評価概念のごく一部にすぎない。よって，本稿が提案した PG モデルの，コミュニケーション行動研究における真の有効性を主張するためには，日本語と韓国語における他の評価概念の分析にも適用可能かどうか，検証する必要がある。さらに，日本語と韓国語以外の言語も対象として，このモデルの説明力について，検証がなされなければならないだろう。

第二に，本稿では，提案した PG モデルが，コミュニケーション行動評価概念の対照を，客観的な方法で可能にするということを示した。しかし，この PG モデルの適用範囲は，それだけにとどまらない。この PG モデルは，ポライトネスに関連する様々なコミュニケーション行動，すなわち，敬語・謙譲語の使用，各種の呼称表現の使用，方言における性向表現（室山 2004）の使用等の説明に応用できる可能性を持っている。というのは，これらの行動は，まさに，ポライトネスを反映するものであり，よって，その背景には，コミュニケーション参与者同士の，社会的接近距離（SD）および心理的接近距離（PD）が多分に関与していることが明らかだからだ。したがって，その検証も，今後の課題として挙げられる。

第三に，第３．４節で指摘したように，本稿で提案した PG モデルは，SD と PD の連動変化を説明するものでなければならない。よって，この点に関する研究も，今後発展させて行かなければならない。

最後に，本稿で提案した PG モデルとこれを用いた研究の成果が，言語教育にも適用されることが期待される。言うまでもないことだが，学習者に，ポライトネスに関わる言語使用を理解させ，実践できるような能力を習得させることは，欠かすことできない言語教育の役割だからだ。

注

＊本稿では，3名の著者の名を，姓のローマ字表記に基づいて，アルファベット順に記載した。われわれの共同研究は，第一著者という序列意識を必要としないからである。

1）Nishijima (1995)，Reinelt (1995)，Marui et al. (1996) では，この概念を Concepts of Communicative Virtues (CCV) と呼んでいるが，“virtues” には文化的倫理的なバイアスがかかっているので，上位概念としては適切であるとは言えない。そこで，丸井 (1996)，Nishijima (1996)，Yamashita (1996) では，より一般的な表現として “evaluating concept of communicative behavior” を提案している。

2）一般に，「**스스럼다**」「**서먹서먹하다**」は，それぞれ，「気兼ねしている」「よそよそしい」という日本語に翻訳される。

3）個別言語の調査研究はある。たとえば，Hermanns (1993)，Reinelt (1995)，Nishijima (2000) はドイツ語，Nishijima (1995, 1996)，Yamashita (1996) は日本語を対象としている。

4）日本語とドイツ語の対照研究としては，Marui et al. (1996) が挙げられる。

5）他のペアでも同様のことが指摘できる。たとえば，「considerate」と「おもいやりのある」が同義として扱われているが，視点に関して差異が認められる。この点に関しては，西嶋 (2003) を参照のこと。

6）もちろん，その他にも可能な方法はある。たとえば，特定の時代に刊行された複数の語義辞典を用いた意味ネットワークの調査はその一つである。Nishijima (2000) を参照。

7）一般に，「**스스럼없다**」と「**허물없다**」は，それぞれ「気兼ねがない」「隔たりがない」という日本語に訳される。

8）第2節で触れたアメリカ英語の「friendly」は，(i) のケースに当てはまる。よって，本稿では，これに相当する日本語の概念は，「親しみやすい」「気さくだ」等であると分析する。

9）「**스스럼다**」「**서먹서먹하다**」とは，通常，それぞれ，「気兼ねしている」「よそよそしい」と日本語訳される。

10）「**예의없다**」は，目上，目下の両者の行動を評価する際に用いる表現である。それに対して，「**버릇없다**」は，目下の行動を評価するときのみに用いられる表現である。

11）無論，日本社会と韓国社会における「礼儀」の定義には，異なる部分がある。

12）この分析は，韓国社会を支える「**정**（情）」に結びつくだろう。本稿のインフォーマントである韓国語のネイティヴ・スピーカーによると，日常的にコミュニケーションをする間柄になれば，「相手が，心理的に近づいてくるのはあたりまえ」であり，また，「相手を，心理的に近いものと想定し，行動するのはあたりまえ」なのだそうだ。

13）西嶋 (2003) を参照。

14）この場合の「大人しい」は，性格が大人しいという意味ではなく，行動がひかえめだという意味である。

15）「**겸손하다**」は，通常，日本語の「へりくだっている」という表現に訳される。

16）「**고자세다**」「**거만하다**」「**오만하다**」「**건방지다**」は，通常，「高姿勢だ」「驕慢だ」「傲慢だ」「生意気だ」という日本語に，それぞれ訳される。

17）「**굽실거리다**」と「**저자세다**」は，一般に，「低姿勢だ」という日本語に訳され，ネガティヴな意味を持つとされる。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. 1987 Politeness: Some universals of language usage. Cambridge: Cambridge UP.

Eelen, G. 2001 A critiquie of politeness theories. Manchester: St. Jerome Publishing.

Hermanns, F. 1993 Mit freundlichen Grussen. Bemerkungen zum Geltungswandel einer kommunikativen Tugend. In Klein, W. P., & Paul, I. (Eds.), Sprachliche Aufmerksamkeit. Glossen und Marginalien zur Sprache der Gegenwart. Pp.81-85. Heidelberg: Universitatsverlag C.Winter.

Ide, S. 1988 Introduction Multilingua 7(4), Pp.371-374.

Ide, S., Hill, B., Carnes, Y. M., Ogino, T., & Kawasaki, A. 1992 The concepts of politeness: An empirical study of American English and Japanese. In Watts, R., Ide, S., & Ehlich, K. (Eds.), Politeness in language: Studies in its history, theory and practice. Pp. 281-297. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

丸井一郎 1996 相互行為の評価概念 高知大学人文学研究 , 4, Pp.219-243.

Marui, I. 1996 Zusammenstos der Normalitaten interaktiver Kooperation im Japanischen und Deutschen. ドイツ文学論集 (日本独文学会中国四国支部編), 29, Pp.58-67.

Marui, I., Nishijima, Y., Noro, K., Reinelt, R., & Yamashita, H. 1996 Concepts of communicative virtues (CCV) in Japanese and German. In Hellinger, M., & Ammon, U. (Eds.), Contrastive sociolinguistics. Pp. 385-409. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

室山敏昭 2004 文化言語学序説 —世界観と環境— 和泉書院.

Nishijima, Y. 1995 Uber den Bedeutungswandel von "teinei". - Zum internationalen Vergleich der Konzepte von kommunikativen Tugenden -. 論文集刊行委員会 (編) 好村富士彦教授退官記念論文集. Pp.207-220.

Nishijima, Y. 1996 Bewertende Konzepte kommunikativen Verhaltens (BKKV) und soziale und kulturelle Verhaltnisse. - Ein lexikalischer Ansatz anhand der Beschreibung in Worterbuchern -. 金沢大学教養部紀要, 3 (2), Pp.155-178.

Nishijima, Y. 2000 Freundlich und hoflich: Interkulturelle Aspekte des kommunikativen Verhaltens. 言語文化論叢 (金沢大学外国語教育研究センター紀要), 4, Pp.185-207.

西嶋義憲 2003 “Was kann ich fur Sie tun?” は「偉そう」か？ —常用句を利用したコミュニケーション行動の比較—かいろす (「かいろす」の会), 41, Pp.19-36.

Reinelt, R. 1995 Wie die Hoflichkeit ihr Gesicht verlor. 愛媛大学教養部紀要 , 28, Pp.131-160.

Yamashita, H. 1996 Zu bewertenden Konzepten kommunikativen Verhaltens. - am Beispiel des japanischen Anredeverhaltens -. 言語文化研究 (大阪大学言語文化部紀要), 22, Pp.273-294.

Politeness Grammar : Analysis of the Evaluating Concepts of Communicative Behavior in Japanese and Korean

Sang-young NAM, Yoshinori NISHIJIMA, and Mariko SAIKI
(Kanazawa University)

Politeness refers to the behavior one observes in order to make realize the flowing conversation with his or her partner(s). In this paper, it is first pointed out that the background factors of politeness are identified from both psychological and sociological points of view. Based on this, a universal model of grammar is then proposed which is designed to explain various expressions of politeness found among speakers of different languages (*Politeness Grammar*). It is also demonstrated in this paper that this model of grammar analyzes and compares the evaluating concepts of communicative behavior in Japanese and Korean in an objective fashion.

Key words : politeness, social distance, psychological distance, evaluating concept of communicative behavior, normality